

留学生に日本文化をどう教えるか：教材開発プロジェクト報告

留学生センター 大 嶋 真 紀

1 はじめに

「日本事情」を担当する者のジレンマはいろいろある。

一つは「日本事情」のカバーする領域の問題だ。日本社会の諸相、日本人の思考パターン、コミュニケーション・スタイル、さらに最近では異文化理解などの領域も含みかねない。要するに「日本事情」とは何かという古くて新しい問いだ。そしてこの問いは教授者の専門性にも関わる。例えば、「日本事情」の教科書でよく扱われる日本の教育制度などというトピックは、多くの「日本事情」担当者の専門外の領域である。筆者も長い間、そのようなトピックを見よう見真似で扱い、苦慮してきた。また専門家に依頼してコーディネーターに徹するという行きかたもあるが、それでは日本語学習の補助者にとどまるか、あるいは連絡等の諸業務担当という、何ともいえない空しさを伴う。

(注1)

次に使用言語にからむ問題がある。「日本事情」は学部留学生を対象とするのが普通だが、機関によってはそれ以外の受講者もいる。日本語能力試験の一級・二級に合格するぐらいの受講者を対象とする「日本事情」はもちろん日本語を使用するが、もう少し低いレベルの学習者にはどう教えるのか。またそのようなレベルの受講者には「日本事情」は不要なのか。一方、たとえ一、二級レベルでも日本語能力が不十分なことも多い。教室では言語の教育をどう補足するのか、などという問題もある。また学習者の側からも、下手な「日本事情」よりは日本語の勉強を徹底してやりたいという声もあがりかねない。

いったい「日本事情」という科目は内容的にも方法上からもそれほどアイデンティティーを欠く領域なのかという疑問を抱きながらも、様々な文献からも、また体験的にも決してそのような中途半端な科目ではないという感触を持ち、むしろ最近では日本語教育のどのレベルでも必須の科目ではないかと考えるに至っている。(注2)

留学生は日本語について学ぶにつれ、ことばの背景にある文化的ルールを発見する。例えばある初級レベルのトルコ人学習者の例だが、それまで日本語の助詞やら、いわゆる「て形」などに悩まされていたのが、ある時、親族呼称で自分の言語との類似性という思わぬ発見をする。また上級レベルの「日本事情」のクラスで贈答の習慣を扱ったところ、留学生自身が昔習い覚えたいいわゆる「やりもらい表現」との関連性を指摘するなど、ことばと文化をつなぐ契機は日本語教育の現場ではいたるところに溢れているように思われる。

本稿では、「日本事情」がカバーすべき領域は何かということを念頭に置きながら、そのようなことばと文化をつなぐ「日本事情」教材について一定の提案を行いたいと考える。本稿では、なぜそのような教材が必要かという理由、開発の経緯、試用の状況等についてまとめた。

2 新教材を開発する理由

このようなテキストを考えた理由として次の諸点があげられる。

①ごく一般的な留学生の日本についての知識は決して豊かではない。もちろん日本語能力によってもかなり左右される。しかし仮に日本語能力がかなり高くても、言語学習に時間を費やしてきただけで、日本の社会や文化についての理解は、普通の日本人高卒者と比べてかなり低いのは当然といえはいる。

また留学生の多くは理系、または経済学専攻などが全国的には主流である。専門分野以外のことに対する知識欲も必ずしも高くなく、またアルバイトなどで時間的余裕もあまりない。これが日本の大学に入学する留学生の一般的傾向である。

②これまでの日本事情教材の多くに共通する特徴として、中上級の日本語教科書としての機能を併せ持つ点があげられる。日本語を学習する観点からは必ずしも欠点とはいえないのだが、それらの教材を使用して教えていると、文型や語彙の学習に非常に多くのページを費やしているために、授業の焦点が文化の学習から言語学習へといつの間にか移行してしまうという難点がある。

③また多くの教材が日本社会の様々な現象、いじめや高齢化社会の問題などを好んで扱っているが、それらは学習者自身に切迫した問題とはいいがたい側面がある。また分析や記述の仕方も表面的になりがちで、文化の教材とは本来どのような内容と方法を備えているべきかについて考えさせられる。

④もちろん従来の教材が、日本理解や日本語学習のために一定の役割を果たしていることは理解できる。しかし、ここで提案したいのは、より積極的な意味で学習者が「文化」についての基礎的な思考を展開していけるような教材である。その中には自国の文化との比較、文化に関わる自己への問いかけなども含まれる。

⑤このような発想の背景には、川上（1999）や小川（2001）などによる学習者中心のアプローチがある。近年の外国語教育におけるコミュニケーション・アプローチの流れを汲み、日本事情教育に於いても学習者の視点を重視する方法論が理論的にも構築されつつあるが、テキストとしてはまだ十分に展開されていないきらいがある。本テキストの主眼はまさにこの点に置かれている。（注3）

⑥日本を理解するにはいくつもの難所があるといわれてきた。わかりにくい、曖昧であるなどという指摘だ。例えば飲酒という行為一つとっても謎はたくさんある。そもそも日本人はなぜそんなに酒を飲むか。飲まないと話ができないのか。飲む際の儀礼の背景は何か。飲んだ翌朝、極端に冷淡になるのはなぜか。学習者の戸惑いはつきない。本教材では学習者の日本社会への疑問を分析し、資料や調査を通じて現象を多角的に把握し、さらには論理的な討論を通じて、日本理解を深めることを目標としている。

以上のように本テキストでは「日本」や「日本人」との出会いを通じて、物事をていねいに考えること、考えるために調べること、さらにそれらをまとめて正確に表現すること、他の人々と論理的に議論することなどを学ばせることなどが、最低限の目標である。しかし、とはいっても、学

ぶことが息苦しいものであっても困る。学ぶ以上は楽しくなければ困る。そういう意図もこめて、テキストの構成と内容を定めている。

3 学部留学生のニーズと目標に沿った内容について

学部留学生のニーズとは端的に言うなら、他の日本人学生とともに授業を受け、単位を取得しなければならないということに尽きる。言うは易しく行うは難しとはまさにこのことで、それが確実に可能となるためには、様々な授業科目、様々な分野の背景にある「日本」についての前提的な事柄を知る必要がある。問題はその「前提的な事柄」とは何かという点だ。またその前提を知れば十分なのかという問いもある。

次の例文は社会学者による平易な文章だ。

「…日本型経営の「神話」もこわれた。今どきこんな雇用関係を維持しては、企業サイドにもっちもさっちもいかないし、被雇用者側でもとつぜんの出向や肩叩きでパニックに陥るだけである。

「家族」も変わった。女は「結婚したら主婦」になり、オトーサンが一家の大黒柱として妻子を養うというタイプの「標準家庭」はあっという間に少数派に転落してしまった。」（注4）

「にっちもさっちもいかない」などという慣用表現や「出向」「肩叩き」「大黒柱」などという新出語彙もあるが、上級レベルではこの程度の文章は平易なレベルといえる。しかし「日本型経営の「神話」」と言われて、留学生は何を思い浮かべられるかという点になるとはなはだ心もとない。

「終身雇用」や「年功序列」といった事柄が言葉のみならず明確なイメージとして頭の中に入っているかという問題がある。また「出向」や「肩叩き」などという語彙を学んだとしても、それらの語彙に伴う悲哀、日本人高校生が想定する場面などまで思い至るのは至難である。

さらには「オトーサン」となぜカタカナ書きになっているか。「大黒柱」という建築用語の語感、「標準家庭」はあっという間に少数派に転落してしまった」という記述はそのまま受けとめるべきか、批判的に読むべきかなどといった問題になると、留学生の「日本」についての前提的な素養ではとても太刀打ちができない恐れもある。

次の例は社会人類学者の文章である。

「…今日でもあらたまった宴会すらも、挨拶を中心とした儀礼的部分と、作法にそって飲食をする部分、ついでくつろいで酒盃がとび交い、ドンチャン騒ぎにいたる、という構成をとっているのである」（注5）

ここでも、留学生はそのような場面についての経験的な知識、礼儀作法の実際、擬態語の語感、歴史的背景などを十分に心得ているとはいいがたいために、読解という作業が単純なことばの読みのにみ終始してしまいかねない。もちろん語学教師はそうした文化的背景についての知識も補足することが多いが、「文化」を担う授業では逆に語学的訓練に手足を奪われ、肝心の「文化」について、集中的に組織的に扱うことを怠りがちとなる。

では留学生が最低限、組織的におさえておかねばいけない領域とは何か。つまり「日本事情」でカバーすべき領域、前提的な事柄は何かという問いが改めて浮上する。ここではとりあえず次の

七項目をあげておきたい。この七項目はテキストを開発する途上で、また十数年「日本事情」を担当してきた過程で考えた項目であるが、今後、改めて論考を必要とする部分である。(注6)

- (1) 日常生活
- (2) 人間関係
- (3) コミュニケーション
- (4) 価値観
- (5) 自然観
- (6) 美意識
- (7) 歴史的感覚

以上の七項目は言葉としてはごく当たり前のことだが、内容を定めようとするのが困難を極める。本テキストでカバーしているのはほんの一部である。また開発の途上でカバーしきれていないのは、(5)の自然観である。重要な項目であるにも関わらず、時間的制約から含めることができなかったことを付記しておきたい。

4 教材開発の経緯

以上のような様々な思惑をこめて新教材の開発に着手したのは2002年4月である。前期の日本事情と同時進行する形で作成していった。6月には日本語教育学会九州大会のポスターセッションにて、教材の原案を提示し、学会員からの意見や評価を受け、前期終了時には全体の1/3ほどを作成した。ここまではほぼ単独作業である。終了時に留学生からのコメントや評価を集めた。この点についてはのちの「教材評価」の部分で述べる予定である。

このような評価を考慮に入れて、校閲、制作を続け、11月までに全体の約2/3を作成した。また後期の日本事情のクラスでも引き続き、試用と制作を同時進行させた。11月末に交流協定校であるオーストラリアのニューイングランド大学で遠隔教育等についての審議を終えた残り時間を利用して本教材を紹介したところ、その場で試用の申し出を受け、また2003年のブリスベーンでの日本研究学会発表を勧められ、開発の経緯、両大学での試用とその結果などを共同発表することとした。

その時点から本教材はニューイングランド大学日本学科長の Sato Van Aacken 氏との共同開発に軌道修正し、たくさんのコメントを交換し、校訂を続けている。2003年3月にはようやく試行版約110ページの完成を見たが、本教材は今後も各方面からのコメント、評価を取り入れ、海外の学習者が広く利用できるような形にまでもっていきたいと考えている。従って現在なお、制作途上にあるといっている。

幸い、開発の途上で、アメリカのノース・ミシガン大学やインドの国立技術研究所などからも試用の申し出を受け、共同研究のネットワークがさらに拡大しつつある。上記ブリスベーンでの学会発表のみならず、香港、メルボルンでも2003年度中にその成果を発表する予定である。(香港での発表は SARS の影響により1年延期となった。)

5 新教材の構成

本稿の構成は、「異文化を発見する」、「異文化の中で生きる」、そして「異文化を楽しむ」の三領域から成り立っている。この三領域に限定するのは恣意的なようだが、一定の理由を次に述べたい。

前段でも述べたように、日本に来日した留学生、また海外の学習者ともに、日本語や日本の社会について学習するにつれ、さまざまな困惑を覚える。いかに日本語に熟達しても、またさまざまな現象を学んでも、なかなか理解しがたい側面が「文化」の中には潜んでいるためである。これは日本人が外国の文化について学ぶ際も同様であると推測できる。「文化」というのは目に見えない網のようなものに覆われ、それぞれの要素、行動、心理などが互いに無関係に見えながらも、微妙にからみあっている場合が多々ある。

本教材の第一のパート「異文化を発見する」の部分では、なるべくそのようなトピックを集中してとりあげるようにした。「あいさつ表現」という一見、何でもなし生活習慣のような事柄でも、仔細に考察するとかなり変則的な部分が認められ、それが文化全体の構造にも何らかの関わりを見せていると思われる場合もある。「贈答」の習慣になると、それはさらに根深く我々の行動や生活習慣、さらには言語にまで組み込まれている様相を見せる。もちろんここでは言語が先か、文化が先かというにわとりと卵のような議論も含まれているのだが、留学生はこのようなトピックを深く追求していくことで、「文化」そのものへの考察を自分自身で展開していくかもしれない。そういった願いをこめて第一のパートの構成を定めた。「タテ社会」「集団意識」「伝統」「文化の雑種性」「非言語伝達」など日本文化についてしばしば言及されるトピックを各ユニットに配置している。

第二の「異文化の中で生きる」は、当初考えたのは異文化の環境下で留学生は何といても適応しなければならないというサバイバル的発想で構成を考えた。いかなる種類の留学生であれ、日本で勉学を継続する以上は何はともあれ、この社会に適応しなければならないという絶対的要請がある。それをある程度助けられるのが「日本事情」という科目なのではないかと考えた次第だ。その発想自体は現在もあるが、しかし適応やサバイバルだけが「文化」を学ぶ目的であっていいのだろうかという疑問が次第に沸いてきて、その後、多少軌道修正している。

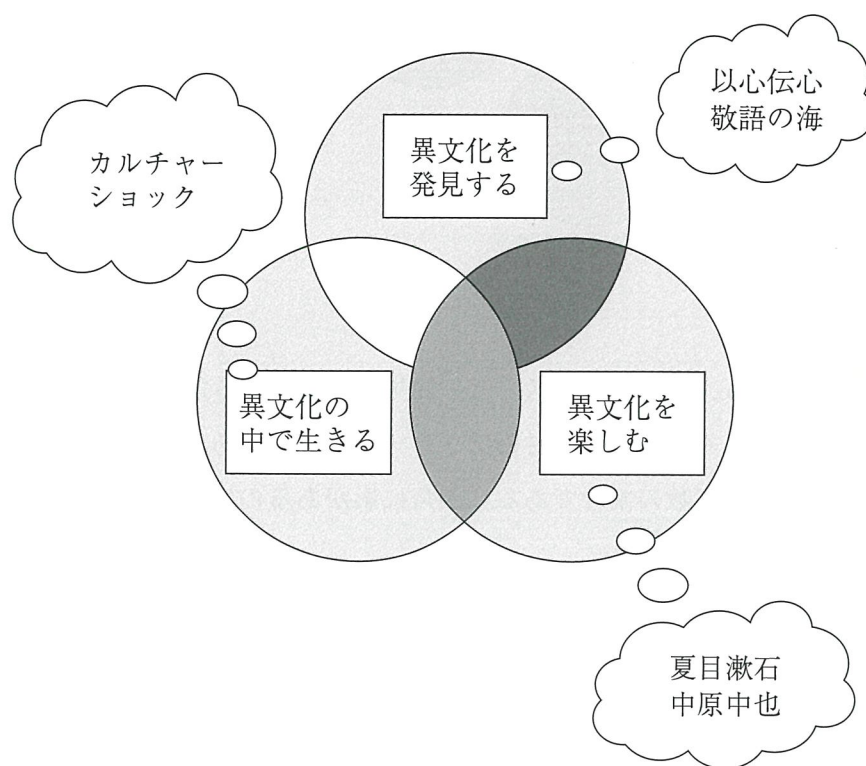
日本に来る留学生は何といても成長途上にある。また日本、海外とも成人の学習者もいるにはちがいないが、成人とは何であろうか。私たちはある日、ある時から突然「成人」になるわけでもなく、また仮にそうだとするとさらに「成人」への道は続くのではなかろうかと考えはじめた。また、異国の環境に置かれると、自分についてまったく発想を変えなければならなくなることもある。これは何も異国のみならず、自分の国の中でも従来とはまったく異なる状況下に置かれると、価値観や発想を180度転換しなければならないようなことはしばしば起こる。

そう考えると「異文化の中で生きる」というテーマで扱うべきトピックはいかなるものがふさわしいのか、試行錯誤を繰り返して選んだのが「異文化とは何か」に始まる一連のトピックである。異文化の中で出会う自分、他人、自分の才能はどう生かすことができるか、カルチャーショックをどう越えられるか、外国語で自己表現するとはどういうことか、人間関係の構築、時代認識などといったトピックにより、すべてがカバーできるわけではまったくないが、学習者がとりあえず、異

文化の中で生きる、生き延びる脚杖にしてもらえたらという願いを込めている。

そして最後に、留学生は日本語や日本社会の難解さと格闘するばかりではあまりに味気がないのではないかという観点から「異文化を楽しむ」というパートを加えた。留学生の専門は工学や経済学などが多いが、専門の勉強以外にもこの国で何か息がつけるもの、何か思いもよらない部分で心を動かされるということがあってもいいのではないかと考えた。必要最低限のこと以外の余剰の部分を提供するの「日本事情」の重要な役割なのではないだろうか。今回の試行版では主に文学者の軌跡を示す手法を用いたが、これだけで「異文化を楽しむ」ことなどできないということは十分想定できる。音楽家や画家、漫画家などさまざまな領域の作品をとりあげたいと考えつつも、冊子の制約、著作権などクリアしていない問題が山積みしているため、試行版ではごく少量にとどめている。しかしのちにも述べるが、留学生の反響がもっとも大きかったのはこの第三のパートであった。

以上の三領域を図示すると以下のようになる。



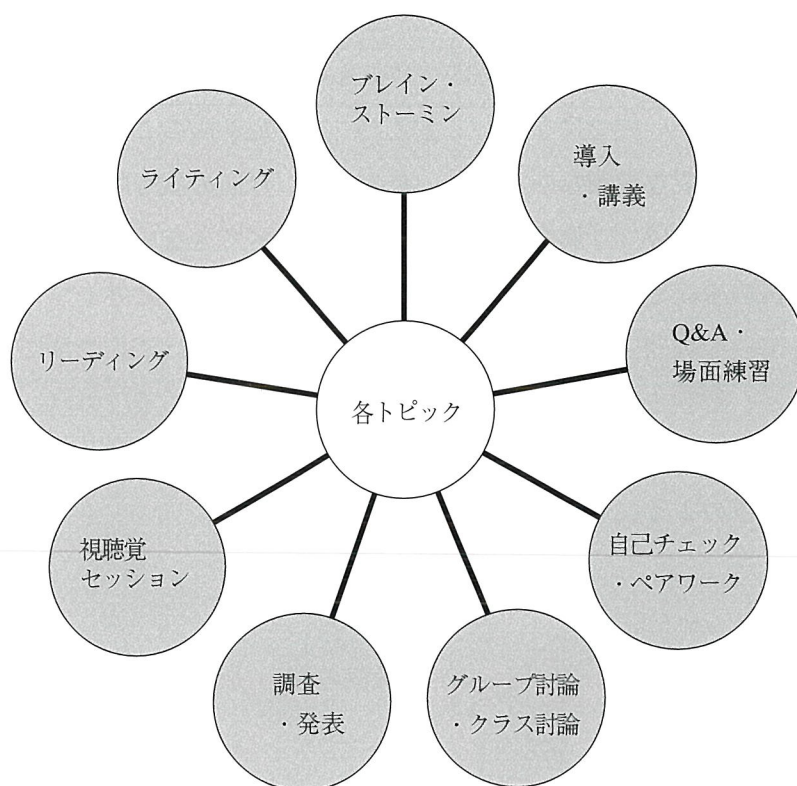
6 教授法の問題

言語にしる文化項目にしる、それを教える際、知識を供給するという側面と、獲得した知識を運用して行動するという側面が考えられる。近年、外国語教育ではこの運用面を重視する手法が主流となっているが、文化項目を教える際も同様の発想が可能である。

本テキストではそのような発想に基づき、言語教育で用いられている様々な手法を各種とりいれている。詳細について論じることはこの報告の主旨ではないので、省略するが、本テキストを使用した結果、学習者の日本文化についての知識がどの程度増し、日本理解がどう深まったかというこ

とを考える際、教授法の問題は決して無関係とはいえない。

以下に本テキストで用いている教授法の見取り図を提示する。



7 他のテキストとの違い

まずテキストの流れという観点から、既存のテキストとの簡単な比較を試みた。とりあげたのは「異文化適応」などをテーマにしている教材と本教材のアプローチの違いである。四角の中のパーセンテージはその課の中で占めるページ数の割合である。四角に影があるのは、言語の学習に力点がある部分である。

教材A：『留学生の日本語』論文読解編 第1課「異文化適応」（2002 アルク）P.10

教材B：本教材 UnitB 4 「カルチャーショック」

テキストの流れ

教材 A	教材 B
<p>読む前に (0.3 p) 3%</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本に来てから、文化の違いに戸まどったことがあるか。 ・カルチャーショックという言葉聞いたことがあるか。 ・自分の国と比較して、日本のいいところ、悪いところは何か。 <p>本文 (2 p) 24%</p>	<p>問題提起 (1/4 p) 5%</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カルチャーショックとは何か。 ・いつ、どのようなことでショックを受けるか。 ・ショックの諸段階とは？ ・ショックを受けた場合の反応 ・ショックを克服するには？ ・日本人の受けたショックの例

アドラーの「異文化への移行体験」の説を紹介。(原文リライト)	導入文 (0.5 p)	7%
・ 第一段階 異文化接触	ことば、食べ物、習慣等、何でショックを受けるか、自分の体験を振り返るための討論素材を出す。	
・ 第二段階 自己崩壊	解説文 & 図示 (0.6 p)	9%
・ 第三段階 自己再統合	Kohls のカルチャーショック・サイクルの説を紹介。	
・ 第四段階 自律	ミニ・リサーチ (1 p)	15%
・ 第五段階 独立	身近なところから事例を集め、分析を行い、口頭発表する。	
語句のリスト (1.5 p) (日英中韓)	ケース・スタディ (1 p)	15%
構造の提示 (1 p)	実際にあったカルチャーショック例を読み、Q & Aを行う。	
内容理解のための練習問題 (1 p)	まとめの討論 (0.5 p)	7%
・ 会話文→アドラーの5段階から選択。	カルチャーショックを克服するのに必要な資質や態度について、選択肢を与え、討論素材とする。	
・ 5段階と満足度を図示せよ。	参考課題1：作文 (0.6 p)	9%
・ あなた自身は今、どこか？	選択課題を与え、レポートを作成。	
読むための文法解説 (1.5 p)	・ 夏目漱石のカルチャーショック	
言葉の練習 (1 p)	・ 敗戦ショック	
	参考課題2：読解 (1.5 p)	22%
	土居健郎の「甘えの構造」の冒頭	
	内容質問 (0.7 p)	10%

教材Aでは「読む前に」という簡単な導入に続いて直ちに異文化体験についてのある学説が紹介されている。原文はリライトされており、留学生の理解を容易にするためと思われる。それに引き続き、語彙や文法についてのリスト・解説・練習などに60%のページ数が割かれ、内容理解についての練習問題が付加されている。この問題中には留学生自身の体験と結びつける設問がわずかであるが含まれている。

一方、教材Bでは問題提起としてカルチャーショックに関わる諸問題が一通り列記されている。これは学習者の関心をひきつけるためである。引き続き導入文で自己体験を振り返らせ、そのあと学説を紹介している。そのウェイトは6%と必ずしも高くない。続いて身近なところからリサーチ、ケース・スタディなどを行わせ、新聞記事の提示、討論、さらには参考課題で夏目漱石のカルチャーショックや敗戦ショックなど話題を広げ、土居健郎の「甘えの構造」の一部を読ませるという段取りになっている。最後の部分にのみ、語彙リストを付し、語学的な配慮をしている。

上記の記述からも明らかなように、学説の紹介に力点が置かれているかどうか、語学学習を主目的とするかどうか、身近な体験の内省や多様な話題を含むかどうかなどの点で上記教材は性格を異にしている。どこでどのような使い方をするかにもよるが、本教材が「文化」について様々なアプローチを学習者自身が行えるように試みている点は強調できる。

その他にも本教材の特徴として次のような点があげられる。

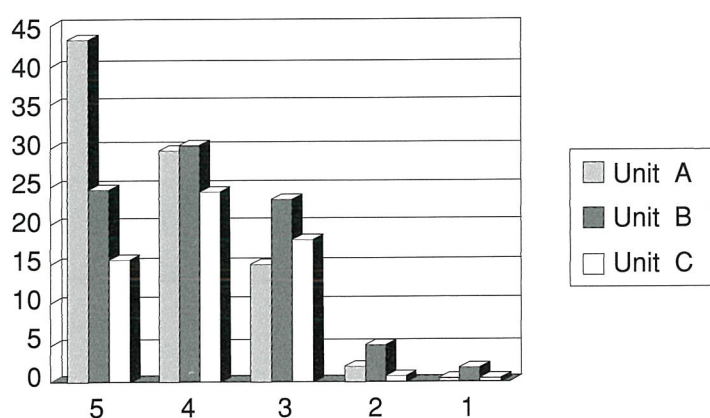
・言語学習に移行しないよう、本文は平易に記述した。参考課題には難解な文もあり、今後、語彙リストなどの補填が必要となるが、原文のリライトは行わない方針である。小学校の国語教科書などでも、執筆者による原文のリライトが行われるようだが、言語観に関わる問題だと考える。

・文化についての教材で扱われているトピックについては、留学生にとってどういう意味があるのか考えさせられる内容のものも多い。介護や登校拒否などの問題は確かに現代日本でしばしば耳にする話題ではあるにしろ、時代や環境の異なる留学生にとって果たして切実な問題と言えるだろうか。もちろんより多く日本について知っているということは決して無駄ではないが、学習時間の限られている留学生にとっての優先順位ということも考慮する必要がある。

・ステレオタイプ的なものの見方を助長しないよう、記述に配慮している。たとえば、ある日本文化教材ではごく何気なく「日本人は他の人と同じように行動したがる」などと記述している例が見られるが、教材の記述という観点からすると注意を要するのではないだろうか。討議の合間に教師が何気なく口にする以上に、記述された文章は重みは増し、ステレオタイプ、偏見としての定着を加速する恐れもある。

8 試用結果

テキスト全体の評価は以下の通りである。Unit Aでは受講者21名中、5段階評価で5と評価したものが40%を超えたが、Unit Bは4と評価した者がもっとも多く30%を超えた。Unit Cも4と評価した者がもっとも多かったが、割合は20%台に止まる。Unit Cについては3と評価した者も20%近い。Unit Bは2、1の評価もあり、全体にまだ学習者の高い支持を受けているとはいいがたい状況である。今後の改良をめざしたい。（なお受講者の中には無回答の者も含まれる。）



学習者の自由記述の部分では、以下のようなコメントが見られた。

とてもよかった	2	かなりよかった	2	楽しかった	2
文化を知る足がかり	1	人物を知った	1	もっと深く勉強したい	1
知識より知恵が大事	1	「痴人の愛」を読み始めた	1	リサーチと口頭発表の体験がよかった	1
「キッチン」を買った	1	いい経験になった	1		

9 今後の取り組みと予定

今後はテキスト使用前に日本文化の基本事項についてアンケート調査を行い、留学生の「日本文化」についての基礎知識の確認を行ったのち、テキストを使用し、さらに、使用後に同じ調査項目を用いて回答の変化を分析することなどを計画している。

本教材は平成14年度留学生施策充実経費及び教育改善推進費の助成を受けて開発を開始した。以下にこれまでの経過をまとめるとともに、今後の予定を付記して本報告を終えたい。

2002年 6 月	日本語教育学会九州地区例会ポスターセッションにて、教材のアウトラインを提示。
2002年11月	オーストラリアのニューイングランド大学を訪問した際、教材の一部を提示し、共同開発がスタートした。
2003年 1 月	共通教育の「日本事情」で、本教材を使用した公開授業を実施。平成14年度の共通教育委員会 FD 報告書にその模様が記載されている。
2003年 3 月	「日本文化テキスト 開けゴマ」試行版完成。
2003年 7 月	オーストラリアのブリスベンで開催されるオーストラリア日本研究学会にて、共同開発者の Sato Van Aacken 氏とともに共同発表を行う予定。
2003年 8 月	香港で開催される国際比較文学会にて、本教材の Unit C に焦点をあて、「日本文学をどう教えるか」について、ノース・ミシガン大学の Carol Bays 教授主催のもと、討議を行う予定。(SARS により 1 年延期)
2003年10月	オーストラリアメルボルン大学主催の外国語学会で、共同開発者の Sato Van Aacken 氏とともに、オーストラリア、日本での試用結果について共同発表の予定。

(注)

- (1) 「日本の教育制度」は日本文化、日本事情では極めて頻繁にとりあげられるトピックである。教材のみならず、いわゆるイマージョンプログラムなどでも採用されているが、学外からの講師招聘等、負担は少ない。尾崎明人, J.V. ネウストプニー「インターアクションのための日本語教育—イマージョンプログラムの試み」『日本語教育』59号 (1986)pp. 126-141
- (2) 細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』(2002 凡人社)
大嶋真紀「留学生にとって日本文化とは何か」『鹿児島大学留学生センター報告書2002』pp. 30-39
- (3) 以下の文献等で、文化を学習者中心の視点で捉える手法が近年唱えられている。
川上郁雄「「日本事情」教育における文化の問題」『21世紀の「日本事情」』創刊号 (1999)pp. 16-25
小川貴士「日本語学習者の日本文化把握の変化と日本事情教育への試論」『21世紀の「日本事情」』第3号 (2001)pp. 4-14
- (4) 上野千鶴子『＜私＞探しゲーム』(1987 筑摩書房)p. 12
- (5) 石毛直道「食事と酒、タバコ」『講座比較文化4 日本人の生活』(1976 研究社)p. 68
- (6) オーストラリアでは、従来の日本事情教材から離れて、独自の領域を扱うようになったとの指摘がある。また語学学習ではなく、文化の分析や相互的な対話を可能とする領域についての検討も始まっていると以下の文献で指摘している。

Yuriko Nagata "The Study of Culture in Japanese : towards a more meaningful engagement with Japanese language studies", in Australian Review of Applied Linguistics, Series S No 15 (ALAA1998) p. 99